



私は、壺に文様やレリーフを彫りつける「刻文」という技法を主として取り入れています。具体的には、植物や動物を観察して写生することを通してデフォルメまたは文様化して器に装飾します。刻文とは、器に文様を刻みつけるものですが、刻みつけるということが持つ意味は非常に重大なものがあると思うのです。それは、器自体に文様を刻みつけることで形と文様が一体化できるという器形を尊重した技法だからです。器体と装飾の間に色彩、質感の違いは存在しないのです。また、刻文自体は薄肉彫りなのでそこには立体感が生まれてきます。そして、それが文様の持つリアルな空間へと変化してくれるのです。この器に刻み付けるといふ刻文技法を突き詰めていけば、必ず強く器形との共存を果たしてより強い空間へとつながっていく大きな可能性を秘めているものだと思うのです。

私は釉薬の中でも透明釉に近い組成の青磁釉を制作の中心に取り入れています。私がこれを取り入れるようになったのは、その釉色の美しさの圧倒的な魅力にあります。

次に、光と影での形の解釈から来しているところが大きいです。器がうっすら青みがかかることにより光と影が強調される効果があります。青白磁とは白磁の胎に透明釉と同じような組成の青磁釉が掛ったものです。これに光が当たると透明釉のため釉自体の透光性は非常に高く光が当たっている部分は白磁の胎を強く照らし出すため釉色は白くなるのです。逆に影の部分は光が届かなくなり胎の表面つまり釉面の青の発色が強くなります。さらに、青磁釉が刻文に与える影響も多大なものがあります。それは、刻文によりできた凹凸の面に、よく溶けて軟らかい組成の釉が凹部に溜まって濃い青を発し、凸部の釉は薄くなって胎の色に近い白っぽい青を発します。これが、刻文の陰影を強調し、刻文が浮き立つだけでなく、そこに奥行きが出来て空間感に繋がるのです。これらの点は、形を何より重視する私の磁器制作に欠かせないものであり、造形要素としての大きな可能性を秘めています。

私は自然界の植物、動物からインスピレーションを受け、その美しさを造形化、文様化して作品として変換してきました。自然界の形は偶然でも、意図して作られたものでもなくそれは、必然性をしっかりと持って存在しているのです。それに自然界の法則にのっとった生命力を感じるのです。自然界のフォルムとはこのような自然界を生き抜く摂理により形成されていて、ここから生まれるフォルムそのもの、プロポーションバランスはとても美しいものだと思うのです。そして、このフォルムを私のフィルターを通して変換し器に持ってくることで器の内外に美しく広がる空間感を作ることを造形の狙いに行っているのです。